

2025年1月19日 久宝教会 降誕節 第4主日礼拝メッセージ

「私と一緒に来てください」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 4章18-25節

先日1月17日は、1995年に起こった阪神・淡路大震災から30年の日でした。「あれからもう30年が経ったのか」というのが、私の率直な思いです。今年も各地で追悼の式典や、記念の礼拝などが行われていました。亡くなった方が6434人、住宅の全半壊が約25万棟に及んだと言われています。私はあの震災を直接は体験していませんが、ビルが倒れ、阪神高速道路の高架が倒れ、火災が広がり、町並みがガレキとなった光景に息をのみ、言葉を失ったことを覚えています。それはまるで今でも戦争が続けられている地域の光景と同じような光景でもありました。……あれから30年の間に、東日本大震災を始め、各地で大きな地震や、台風、豪雨、土砂崩れなど、激甚化した災害が各地で、毎年のように起こり続けて来ています。

とはいえ、当事者、体験者として、30年前のあの日あの時に、あの経験をされた方にとっては、いくら年月が経ったとしても、決して震災の経験は終わっていない。今も尚、続いているのではないかと思います。ある人は「『あの日を生かされた者』として、今も歩み続けている」と語っていました。またある人は「自分は、あの日『生き残ってしまった』。その負い目をずっと感じ続けている」とも語っていました。多くの人たちの命が失われ、それまでの日常生活が壊されました。そのような異常な体験を、どのように受け止め、理解し、意味づけていくか……。そこには決して「唯一の正解」というものは存在しないのだと思います。一人一人の人が決して同じではないように、過去の出来事を「感謝して受け止め、将来への教訓として生かしていくこと」だけが、唯一の正解でもなければ、模範解答でもないはずで、「どうして自分だけ生き残ってしまったのか」「どうしてあの人が、あんな目に遭わねばならなかったのか」「どうして、どうして……」。それらの経験は、決して感謝なんて出来ないし、納得なんて出来ないし、理解することも出来ない……。何年経っても、何十年経っても、そういうことも当然あるのだろうと思います。自分の命の歩み、人生の経験の意味付けは、他人から与えられるものではなく、自分自身が見出し、見つけ出していくものです。だからこそ尊い。だからこそ、一人一人の尊厳に深く結びついているのでしょう。当事者ではない周りの人たち、本人ではない友人たちは、あれこれ口を挟んで、解答例を並べ立てるのではなく、ただ黙って一緒にいること、寄り添っていること他には、何も出来ることはないのではないかとも思い

ます。

さて、今回の聖書のお話は、「イエス様が最初の弟子たちとして、4人の漁師を選ばれた」というお話でした。ガリラヤ湖で朝早くに漁をして、そこで水揚げした魚を市場に運んでいただろうということを見ると、時間帯はきっと朝早い時間だったのでしょう。イエス様は湖で網を打っている最中だったペトロとその兄弟アンデレに声をかけ、その後には湖畔で網の手入れをしていたヤコブとその兄弟ヨハネに声をかけ、4人はそれぞれイエス様に従ったと書かれていました。

このお話を読む時、私たちは「自分たちもこの4人の弟子たちのように、イエス様から呼ばれる側、声をかけられる側として、自分たちの生活を成り立たせているもの、例えば、仕事や商売道具、お金や食べ物、持ち物など、それらに執着するのではなく、それらを捨ててイエス様に従うことこそが、唯一の大切なことであり、模範解答だ」と読んでしまいそうに感じます。今回の「マタイによる福音書」4章の後には、有名な「山上の説教」が5章から7章にわたって続きます。そこにはイエス様の語られた言葉の数々が記されていますが、その中にも「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い煩ってはならない。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな添えて与えられる」(6:31,33)と記されていたり、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、叩く者には開かれる」(7:7-8)と記されていたりします。ですから、「人や金や物に頼るのではなく、神様にのみ頼る」ということを、中心テーマとして読みたくなりますが、この4人の漁師を弟子にする場面では、果たして本当にそのような弟子たちの心の持ち方や生き方の姿勢が問われているのでしょうか。

この場面では、潔く「網を捨て」(4:20)、「舟と父を残して」(4:22)イエス様に従った4人の姿は、それこそ優等生のようにになっていますが、福音書に記されている弟子たちのその後の姿は決して格好いいものではなく、優等生どころかむしろダメダメの落第生のようなようです。イエス様のお話を理解せず誤解したり、最後まで付き従いますと言っていたのにも拘らず、イエス様が逮捕されると怖くなって逃げ出し、関係者だと問われると「あんな奴は知らない」と言って罵り、嘘をつく始末でした。「イエス様は、そんなにも醜い、罪深い私たちをも選び出し、救い出してください」と言うことなのではないでしょうか。どうでしょうか。今日は、このお話を弟子たちの側からではなく、イエス様の側から改めて読んでみたいと思います。先週は「マタイによる福音書」3章で、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けたというお話を読みました。洗礼者ヨハネが活動していたのは、「ユダヤの荒れ野」と呼ばれるところで、北にあるガリラヤ湖からずっと南に下り、死海に近いヨルダン川沿いの荒

野・砂漠だったと考えられています。そこに「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て」(3:5)おり、イエス様もその中の一人でした。その後、イエス様は同じく「荒れ野」で悪魔からの試みを受けられました(4:1-11)。そして4章12節では「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」とあります。

人々から大人気だったはずの洗礼者ヨハネが、時の権力者たちによって逮捕、投獄され、後に殺されていくわけですが、その報せを聞いてイエス様は大変驚かれたのだらうと思います。イエス様の師匠、先生であったヨハネが逮捕されたと聞き、イエス様は「次は自分がバトンをつなぐ番だ。ヨハネ先生の意志を継いで、自分が神様の意志を人々に伝えていくんだ」と一念発起して、奮起したのでしょうか。私はどうも違うのではないかと感じています。ヨハネはシオンの丘と呼ばれる丘の上にあるエルサレムの神殿や都とは対照的に、東にある死海に向かって低く低く下って行ったヨルダン川のほとりで、人々にたった一回の洗礼によって、生き方が転換されるということを伝えていました。それは旧来のエルサレム神殿において律法に定められた祭儀を繰り返し行うことで救われる、という権力者、為政者、宗教指導者たちの教えとは全く異なるものでした。だからこそ、その教えに惹かれて、ユダヤ全土から人々がヨハネの所にやって来たのでしょうか。イエス様もそのヨハネの教えに共感し、そこにこそ神様の計画、御心があると確信して、洗礼を受けられたのだと思います。けれども、そのようなヨハネの主張は、権力者たちにとっては不都合なものでしたから、彼は逮捕され投獄されてしまいました。その報せを聞いたイエス様は、神様の御心に従った義人が捕らえられる、「預言者の受難」という出来事を前にして、その理不尽さに困惑し、戸惑ったのではないのでしょうか。そして自らの身の危険も感じつつ、南部のユダヤ地方から、出身の北部ガリラヤ地方へと身を隠すように退いていかれたのではないかと思います。

ヨハネの逮捕という事件を受けて、時代の変化、時局の急展開を感じ取りながら、「天の国は近づいた」「神の国はもうすぐそこまで来ている」(マタイ4:17)とイエス様は宣言し始められました。そもそもイエス様が生まれ育った時代背景としては、イエス様が生まれて間もなく、ユダヤの領主であったヘロデ王は死に(マタイ2:19)(紀元前4年頃)、民衆たちによる抵抗運動がユダヤ全土にまで広がりましたが、ローマ軍によって鎮圧され、ガリラヤの村々は焼かれ、2000人にも及ぶ男女が十字架につけられたことがあったようです。そこから30年を経て、またヨハネが逮捕されました。神の国の到来、命の神による解放と統治を望む人々の声は依然として多くあったものの、権力に盾突くとどうなるかは想像に難くなかったはずで、ですから、福音の宣言をされたイエス様の内心としては、神様の御心への

確信がありながらも、一方では心中穏やかではない、不安や恐怖心もあったのではないかと想像します。故郷のガリラヤ地方で、宣教活動を始められた時に、イエス様はどうして弟子たちを必要とされたのか。もし本当にイエス様が武器を持つ兵隊たちを前にして、大軍の天使を自由自在に操ることが出来る(マタイ 26:53)ような超能力者だったら、わざわざ無力で情けない弟子たちを必要とはしなかったのではないのでしょうか。たった一人でも、敵対者が何十人何百人いようと、神が共におられるのだから、恐るに足らずで、勇猛果敢に突き進むことが出来たのではないかと思います。けれども、そうではなかった。クリスマスに人間の赤ちゃんとして生まれたイエス様は、強さだけではなく弱さも含めて私たちと同じ人間でした。いつも笑顔で喜んでいただけではなく、時に泣くこともあれば、怒ることもありました。弟子たちに「恐れるな」「怖がることはない」と言いながら、ご自分でも不安を感じたり、恐怖を感じたりすることもあったはずです。

そのようなイエス様がその宣教活動の始めに、4人の漁師を弟子にした。それはイエス様の活動が、決して独りでは出来なかったということ、共に働く仲間が必要だったということであり、また一緒にいてくれる友、隣にいてくれる仲間がいるからこそ、心強く歩むことが出来るということであったのではないかと思います。イエス様が弟子たちに言われた「私に付いて来なさい」とは、上に立つ指導者が、下々の者たちに掛けている言葉ではなく、むしろ初めてのことに挑戦する子どもが、不安がって親や周りの人たちに「一緒にいて／一緒に来てちょうだい。そうしたら心細くなくなって頑張れるから」と懇願しているような言葉なのかもしれません。

ガリラヤ地方の村々を回って宣教活動を続けられたイエス様は、家も家族も仕事も持たず、当時の社会の中でも決して「普通」ではありませんでした。そして、そんなイエス様の「私と一緒に来てください。手伝ってください」という言葉に、耳を傾け、実際に行動に移してくれたのは、同じく社会から差別され、除け者にされていた漁師たちでした。更にそのような彼ら、イエス様一行の所に、集まって来た人たちもまた「いろいろな病気や痛みを苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人」(マタイ 4:25)たちでした。

イエス様の活動が、エルサレムの丘の上の神殿からではなく、ヨルダン川のほとりの荒れ野の低みから始まったように、神の国も社会の中で低く小さくされている人たちの間から実現されて来るのだらうと思います。そしてそれはたとえイエス様であっても、一人で出来ることではありません。隣にいてくれ、寄り添ってくれ、共に働いてくれる友、仲間がいてこそ、できることです。私たちは一人ではありません。私たちもまた「一緒に来てください」「一緒にやってみてもらえませんか」と隣の人に声をかけることを通して、今日も神様からの招きに応えて参ります。